

---

# 彼女は、異界の冬の女王

げんたろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女は、異界の冬の女王

### 【Nコード】

N5416Y

### 【作者名】

げんたろう

### 【あらすじ】

『異界の春の王』である祖父と、人間界の女王である祖母の間に生まれたのが、父。

そんな父が海釣りで釣り上げたのが『異界の人魚』の母。兄妹は普通に人間ですが、私は生まれるとき『異界の冬の王』がタイミングよく退位しちゃったので、『異界の冬の女王』になりました。

『異界の王』らしさって、個性なんですけど、お兄様は『黒歴史は初恋が妹』で、妹は5歳くらいから『男はおっさんに限る』とか言っ

ちゃっているし、個性っていうより遺伝ですよね？  
そんな私は、魔物討伐に向ったお兄様の助っ人に向かい、人間界屈指の大国の皇太子殿下に見初められました。  
女王と王子妃の兼任はムリですから！！

## 友の妹は、異界の冬の女王

私ハルベルト・シュタインベルクが今居る場所は、土埃で視界の悪い戦場だ。

目的は異界から入り込んだ魔獣の一掃。

我らが住む人間界と異界の間にはたまに歪みが出るのだが、今回そこから魔獣が入り込んだためだ。

今回の戦いは魔獣 vs 人間界

シュタインベルク王国からだけでなく、各国から手練れてだの戦士が集まってきており、現在混戦状態にだ。

それぞれの国にメンツがあつたため、大将を決めずに戦いを開始してしまつたのだが、明らかに間違ひだつた。

「ものすごつく、ジャマだよねえ・・・人間が」

背を庇いあい戦っていた友人・・・ティ・ルナ・ノグの皇太子であるエドワードが、ものすごくさわやかな笑顔で呟いた。

彼の言うとおり、人間がジャマで魔獣に致命傷を負わすことが出来ない。無理に剣を振り下ろそうものなら、巻き添えで兵がやられてしまいそうだ。

「一旦、引いたほうがいいか？」

「んー。僕ら2国が引いたって、混戦なのは変わらないとおもつよ  
い。」

へたに引いて村や町を襲われても困るし。そろそろ空から援軍が来るから」

「………空から？ 君の国の魔法騎士団か？」

この世界に魔法は「ほぼ」存在しない。

唯一、ティ・ルナ・ノグの地で生を受けた一部の者に魔法が使える。絶海の孤島である「常春の国」ティ・ルナ・ノグの大地や空気に、魔力があると言われているのだ。

そして、このような人間界全体に脅威を及ぼす魔獣討伐などの際、魔力を持って生まれ、技を磨いた魔法騎士が出張してくることがある。

ハルベルトも幾度か魔法騎士に逢ったことはあるが……彼らの交通手段は「陸」だった。

「空」からやってくるということは、魔法騎士の中でも高位のものではないのだろうか？

「僕の国ってというか、人間界の人物じゃないんだよねー。異界の女王様だよ」

「異界だって？」

現在異界からやってきた魔獣と戦っているというのに「女王が助っ人」に来るといえるのか？ しかも私達の？

「あー、来たみたい」

エドワードが上空を仰いだ。

土埃の先、太陽の手前。鳥の影が見える。

随分大きいように見えるそれが「異界の女王」なのか？

それは上空を大きく旋回しながら、どんどん近づいてくる。そして、それが真つ白い大鳥であることが分かる頃、白い光がまっすぐに巨大な魔獣を貫いた。

それは太陽の光のように優しい色ではなく、とても冷たい色だったが、とても静かな上、周囲を無音にしてしまう付加まであったのだろうか。

騒々しいはずの戦場が静まりかえった。ジャマだと思った兵士も凍ったように停止している。

土埃がおさまってくると、凍っているのは兵士ではなく、巨大な魔獣だった。

上空の大鳥はいまだ旋回しており、そこから一つの影が凍った魔獣に向って落ちてきた。

それは人間の形をしていて、右手には巨大な槍を構えていた。

槍は魔獣を貫き、凍った魔獣はひび割れ、小さな破片となり、その破片すらも霧氷し、大気に溶け込んだ。

大鳥から飛び降りた人間は、槍を一振りすると、それは華奢な剣に変わり、それを腰に佩<sup>は</sup>いた。

太陽の光で、細かい金色の粒が輝くように光る銀の上と、星空を映した藍色の瞳の……見たことも無いほど美しい女性だった。彼女が「援軍」で「異界の女王」であることも頭から消し飛んだ。圧倒的な「美」。圧倒的な「強さ」。

強さと美は比例するものだろうか。

世界中の名高い戦士達が一丸となり挑んできた魔獣を、あつという間に倒してしまったその女性は、エドワードに手を振った。

「ごめんなさい。思った以上に歪みから距離があつて遅れてしまつたわぁ。お兄様はお怪我はない？」

「大丈夫だよぉ。死人も出なかつたし、ありがとうね」

「お兄様を見殺しにはできないもの。早く可愛い姪っ子が甥っ子の顔を見せてね」

「あはははは。リデイの子供の顔とか僕は絶対みたくないけどなぁ」

「……………兄妹？」

私が呟くと、『実はそうなんだー』とエドワードが妹だという美女を紹介した。

「僕の妹。ビックリするくらい美人デシヨ？」

「あ、ああ……」

「その上、ビックリするくらい強いんだよね」

「そ、そうですね」

彼女に向つてそう述べると、美女は微笑んだ。

「都合上名乗ることが出来ませんの。『エドワードの妹』とでも認識していてくださいますか？ 初めましてシュタインベルクのハルベルト殿下」

優雅に腰を折ると、上空を見上げた。

旋回中の大鳥がボバリングをしながら彼女の傍らに降りてくる。土埃がたたないところを見ると、彼女が魔法で抑えているのだろう。大鳥は真っ白で、翼には光の粒がキラキラと輝いている。異界の生き物といえば魔獣しか見たことがなかったが、この美しい鳥の異界の生き物なのだろうか？

「そろそろ帰るわねー、お兄様」

「え？ ティ・ルナ・ノグまで送ってくれないの？」

「今回の歪みは真逆なのよー。近所に開いたら遊びにくるから」

美女は鳥の上にフワリと降り立つと、私に向って再び礼を取った。

「麗しき人間界の王子様。ごきげんよう」

そして手綱も無いというのによろめくこともなく、大空へ飛び立ち、あっという間に影すらも見えなくなった。

「僕だけ逢ったっていったら、家族から怒られそうだなー」

エドワードがのほほんと呟く隣で、私は彼女の去っていった空をただ見つめた。

魔獣の姿はもう無く、それが荒らした地も美しく整われている。各

国の兵士には傷一つなく、皆が呆然と空を見ている。

それは全て彼女の力であるはずなのに、痕跡が何一つ残されていないためか、まるで彼女が幻のように感じた。

だが、確かに居たのだ。

私はエドワードを見た。

「ん？ 何？」

「妹さんに紹介してくれ」

「したじゃん」

「ああいうのではなく！」

私が言い募ると「あー、ムリムリ」とエドワードは手を横に振った。

「あの子に対しては制限の魔法がかかっているんだもん。『ボクの妹』くらいしか紹介できないし、情報を言っても君の耳には届かないよ。」

唯一言えるのは『異界の冬の女王』だから、ボクの国に来て、基本的にはいないよ」

「基本的ということは、たまには居るんだな？」

「まあ・・・歪みが近所に出来たら遊びに来ることはあるね？」

そして私ハルベルト・シユタインベルクは、ティ・ルナ・ノグへの留学を決意し、半年後に絶海を渡りその国へと足を踏み入れた。

## 私が、異界の冬の女王になった理由（わけ）

私はティ・ルナ・ノグという国の第一王女として生を受けました。

祖父は、『異界の春の王』で、母は『異界の人魚』です。

祖母は、『夫選び』のパーティに祖父が乱入し出会いました。

父母は、父が魚釣りをしていて、海中の歪みから『異界の人魚』である母を釣り上げたことがなれ初めです。

ぶつちやけ『ティ・ルナ・ノグ常春の国』でしかありえない現象です。

兄は普通に生まれましたが、私が生まれる前後に『異界の冬の王』の代替わりの時期が来ました。

とてもランダムな代替わりの時期は、即位後1分後〜2000年後くらいランダムです。ランダム過ぎです。

前の『異界の冬の王』即位期間は1111年1111日1111分11秒だった祖父が言っていました。あの人たまに真面目な顔して冗談を言うので信用なりません。

退位時期というのは、4人の『異界の四季の王』だけにわかるらしく「あ、今、冬のが退位した」ってピンとくるらしいです。

自分以外の王にもバレるので、退位しなかったフリとかは出来ないんだそうです。

で、新しい王も「あ、こいつだな」って分かるんだそうです。それが、生まれたばかりの私でした。

退位した王は、使役していた者たちのエサになるので、私は前代の冬の王を知りません。

私にも無数の使役者がいるので、1分後か2000年後くらいにエサになるんだと思います。

ともかく、新生児では『異界の冬の女王』は務まらないので、残りの3人の王が私を一時的に成長させました。

なので、私は0歳〜10歳の間、ずっと10歳の姿でした。ぶつちやけ、5年くらいで飽きました。

その間に女王らしくなったと思います。異界での女王らしさとは『個性』です。ようするに私は個性的なのです。

でも『初恋は年上の姿の妹』という黒歴史を持つエドワードお兄様や、『男はおっさんに限る』と5歳くらいから唱えていた妹のデイジーがいるから、個性というより遺伝のような気がします。

個性的な私は、たまに生まれた世界に遊びに行きます。

この間はお兄様が魔獣退治に出かけたと聞いて（異世界通信ってうのがあるんだよ）、助っ人に出かけてみました。

瀕死のお兄様を格好良く救おうかと思っただんですが、ちょっと早く到着しすぎました。元気すぎてガツカリです。

そのときシュタインベルクという、人間界で一番大きな国の皇太子が居たので、引退（？）してもティ・ルナ・ノグの王女ですからきちんと挨拶しましたよ。名乗りはしませんでしたけど。お兄様の親友らしいですが、滅多に会うことはないでしょう・・・と思っていたんですが、この間里帰りしたら留学してティ・ルナ・ノグにいらしてました。

再会してすぐに求婚されたのにはちょっと驚きましたけど、断っておきました。

私は『シュタインベルクの王妃』にはなれませんが、ハルベルト殿下も『異界の冬の女王の夫』にはなれないでしょう？

そう言う風に理由を申し上げたら「解決案を考える」とおっしゃってました。

ハルベルト殿下が求婚を取り下げるのが、一番てつとり早い解決案なんですけどね。

ともかく、2年は留学しているらしいので、1ヶ月に1度は里帰りしている私はしばらく逢うことになりませぬ。

いっそ、デイジーにすればいいのって言うたらデイジーが怒っていました。どうやら意中の方が妹にも出来たみたいです。

**私が、異界の冬の女王になった理由（わけ）（後書き）**

ティルナノグは「常若の国」という意味なのですが、あえて「常春の国」としています。マリネラじゃないよ！（@パタ 口）

「常若の国」は色々な伝説がありますが、色々混ぜて脚色した別物です。ご了承ください。

異界の冬の女王の、国創り（前書き）

独白っぽく。

## 異界の冬の女王の、国創り

話は私が新生児の頃に戻ります。

新生児ですが、3人の『異界の四季の王』が成長を早めたので生後1ヶ月にして見た目は10歳児です。

頭脳に至っては『異界の王』レベルです。

産まれて「オギヤー」といったときから私の思考はクリアです。異界の森羅万象全て理解していました。

お母様の産道で意識を持たなくて良かったですわぁ。

祖父で同僚な『異界の春の王』曰く11111年と11111日111時間11秒続いたという全冬の王の居城がまだ残っていました。趣味じゃないので消滅させました。

消滅させてみると、まだあったほうがマシだったかも？ な風景になりました。

視界一面、白と灰色です。なんですよ、このモノトーンの世界は。殺伐としすぎていますわ。

私は冬の女王ですが、生まれは常春の国。ピンクも緑もオレンジも大好きです。

美的感覚にも優れていると自負していますの。

私の第一の任務はこの殺風景な冬の国を、冬っぽくありながらセンスよく飾り付けることだと思いました。

まず、居住ですわね。

やはり城でしょうか。黒も白も灰色もダメです。私はシャンパンゴールドというカラーに決め、繊細かつ優美な城を魔法で作り上げました。

白と薄い金色の混じった城。アクセントは藍色と銀です。私のカラーですわね。

城の廻りには、銀の幹と緑灰色の葉をつけた樹を作りました。

風が吹くと葉が雪に変化するしくみです。これなら庭掃除の必要がないですものね。

実は銀色で使途たちの主食になるよう、栄養豊かなものにいたしましたしょう。

シャンパンの流れる川を作ったり、虹色に変化する羽虫を作るなど、いわゆる天地創造に夢中になっていると、生き物の気配がします。

どうやら私に使役されたい者達のようにです。

王に使役されるということは、異界の生き物にとってはとても名誉なことなのです。

優雅な城生活のためには有能な人材を選ばないといけないですが、そこその実力がないと王には近寄れませんので、そのあたりは楽しんですわね。

私は全身灰色の女性に、オレンジの衣を与えました。

血色の悪い黒髪の男性に、温かな茶色の衣装を与えました。  
四本足の銀の毛並みの獣に、赤いスカーフを巻きつけました。  
薄紫色の三姉妹に鮮やかな紫のマントを与えました。

彼らは私の侍女となり、侍従となり、騎獣となり、門番となりました。

私は冬の女王の領地に目を配り、大きな歪みは修復し、夕子の悪い魔獣は調教し、春の王と夏の王と秋の女王とも親密な関係を築きました。

概ね異界は平和で、たまに刺激的で、退屈が過ぎると、里帰りしました。

こうやって私は1分〜2000年の間、冬の女王であり続けます。  
そして終焉は思いもかけずやってきて、私はいずれ無に還るのでしよう。

異界の冬の女王の、国創り（後書き）

対っぽい話をもっ一本投稿します。

私の主は、異界の冬の女王（前書き）

ものすごく短いです。

## 私の主は、異界の冬の女王

茫洋と白い大地に寝そべっていると、強大な力を感じ、身体を起す。目の前には優美な城がそびえていました。

灰色の岩の上で片足を抱えて足元を見つめっていると、黄金色の川が出来上がっていました。

巢で永く続く退屈を眠りで紛わせていると、鼻先に虹色の羽虫が止まりました。

3人で何も生み出さない白い大地に指を走らせていると、目の前にみたことも無い樹が生まれました。

それで、わたしたちはようやく王が変わったことに気付いたので。

わたしたちは力の源に近づいて行きました。

新しい王を見たいという本能的欲求に逆らえなかったのです。

新しい王は、小さな身体を丸めて、黄金色の泡立つ川の中に、色とりどりの魚を生み出していました。

新しい王は、小さな手を広げて、雅に歌う小鳥を作り出しました。

新しい王は、ステップを踏んで白い大地を銀色の芝生で覆いました。

新しい王は、樹をつついて、実にかぐわしい臭いを与えました。

なんて鮮やかな魔力の奔流でしょうか。

私達は一瞬で新しい王に見せられ、使役を願い出しました。

オレンジの衣を、暖かい茶色の衣装を、発色の良い赤いスカーフを、鮮やかな紫のマントを私達は主に与えられました。

そして、侍女に、侍従に、騎獣に、門番になり、名前を与えられました。

侍女はオランジュ

侍従はアガット

騎獣はアマランス

門番は、サルビア、パーピュア、ヴァイオラ

冬の女王の4柱といわれる我らはこうしてお役についたのです。

**私の主は、異界の冬の女王（後書き）**

名前は色をイメージしてつけました。深く突っ込みは禁止です。  
門番3姉妹は1セットとして考え4柱です。

## 異界の冬の女王と、ボクの黒歴史

人って、触れられたくない黒歴史ってあると思うんだよね。それが、ボクにとっての『初恋』。

甘酸っぱいとか世間では表現される『初恋』だけど、ボクのは甘酸っぱくなくて、しょっぱい思い出だ。

ボク、エドワードはティ・ルナ・ノグの皇太子だ。ボクの国の王族には姓はないので、外で名乗るときは「ティ・ルナ・ノグのエドワード」って言う。

王族として恥ずかしくない教育は受けているけれど、敬語は滅多に使わない。うちの王族は皆そうだ。

少しバカっぽく話していると相手が油断するっていうのもあるけど、楽るのが一番の理由。

さて、ボクは波打つ黄金色の髪とキラキラ輝く海色の瞳と、健康な肌色と、太陽のような微笑みの「どこから見ても王子」な王子だった。

性格はオチャメで完璧な容姿に親しみやすさを添えている。

そんなボクがいつものように「ばあやと社交ダンスとかやってられないよね！」と思って城から抜け出そうとしたときだった。

ボクが8歳の頃だったかな。

抜け出そうとした植え込みの隙間に、違う隙間があることに気付いた。

そこからひよっこりと顔を出したのは、ボクよりちょっと年上の、銀に金の粉を振りまいたみたいな髪と、夜空に輝く星を映した瞳をした少女だった。

ちなみに、こんな表現をそのときのボクが思いつくわけがない。彼女が自分をそう表現したんだ。そのときに「遺伝」という言葉を思い出しておけばよかったよ。ボク達って本当に似てるよね。

ボクはその少女にすっかり夢中になった。

「遺伝」のせいか、ボクと少女はウマが合った。

父に文字通り釣り上げられた母が「運命の人だと直ぐにわかった」って言ってたけど、この少女がボクの「運命の人」だと思ったんだよ。

ボクの人生に大きく関わるってことでは「運命の人」というのも、あながち間違っではないんだけどね。

ボクたちはすっかり意気投合して、日が暮れるまで一緒に遊んだ。そして一緒に城に戻った。

父と母がビックリした顔でボクらを迎えてくれて、ボクはこう言ったんだ。

「ボク、大きくなったらこの子と結婚する！ 運命の人だもん！」

ああ、今のボクがその場にいたら、当時の天使のように無邪気なボクを張り倒したいよ。

父は爆笑し（あの人は時々とんでもなく無礼なんだよ）、母は苦笑して「エドワード、その子は貴方の妹なのよ。・・・大きくなったわね」って涙ぐんでその子を抱きしめたんだ。

妹だった少女は、ボクの肩を叩いて「聞かなかったことにするね」って言うてくれたけど、その優しさが！ 逆に辛い！

妹は確かに聞かなかったことにしてくれた。

でも、父はそうじゃなかった。

時々無礼になる父は、そのときとても無礼だった。

ボクの淡い初恋をじいやとばあやと大臣と侍女と騎士にしゃべっちゃったんだ。

彼らは「ボクの微笑ましい初恋」を家族や友人に語って聞かせた。そういうわけで、僕の「不毛な初恋と失恋」は国中にひろまったってわけ。黒歴史だろ？

しかも10年以上経ってもまだ話題に出るんだよ。勘弁してほしいよね。

## 異界の冬の女王と、ボクの黒歴史（後書き）

私の黒歴史は、青春時代某二次元キャラの名前をペンダントに彫ってもらったことです（痛すぎる！！！！）が、ぶっちゃけた！）。しかも外人。

異界の冬の女王に再会するために（前書き）

がんばったんだよ！

## 異界の冬の女王に再会するために

シュタインベルク王国は、人間界の中央に位置する大国だ。ミッドガルド

300年ほど前までは一領主であったシュタインベルク一族が、周囲を吸収しながら領土を拡大し、150年まえにシュタインベルク王国として建国した。

私の父は5代目の国王で、私ハルベルト・シュタインベルクもいずれ父の跡を継ぐことになる。

歴史は浅いが、強大な軍事力と豊かな国庫をもつシュタインベルクと懇意になりたい王族や貴族は多く、私にはたくさん『婚約者候補』がいる。

しかるべき時（「それはいつだ！」とよく父に言われる）、私はその婚約者候補から王妃にふさわしい娘を選ぶつもりだったが……のだが。

私は恋に落ちた。

我が友ティ・ルナ・ノグのエドワードの妹にして……異界の冬の女王。

彼女は何もかもが規格外だった。

ティ・ルナ・ノグで生れ落ちたものにだけ稀に現れるという魔力の量も。

嫁ぐ以外は生国から出ず、淑女の中の淑女として育てられるべき姫としても。

そして美貌も。

魔法騎士達が複数で挑み、ようやく倒せる魔獣を、槍の一刺しで霧散し。

男装で騎獣をあやつり、戦場に現れ槍を振るう勇猛さ。

美姫と名高い令嬢達が霞んで見える綺羅綺羅しい美貌。

あまりの鮮烈な印象に、私は彼女になんと言ったのか全く覚えていない。

彼女が名乗らなかつた理由も追求できなかつた。

我に返った私は、彼女の兄であるエドワード王子に、正式に彼女を紹介してくれるよう頼んだが、彼は「あー、ムリムリ」と手を横に振った。

そのしぐさは、彼の言うところの「うちの父つてたまにすごく無礼なんだよね」という言葉を思い出させた。彼らはまさしく親子だろ

う、と。

追求し、彼女が「たまにであれば、ティ・ルナ・ノグを訪問する」ということが分かり、私はさっそく留学の決心をした。

まずは、父に全てを打ち明けた。

「心に決めた女性が出来ました」

「よし、すぐに婚約しろ！」

私が身を固めないのが、一番のストレスだという父は即効で命令した。

「まず、求婚したいのでティ・ルナ・ノグに留学してもいいでしょうか？」

「・・・ティ・ルナ・ノグの娘か。ひよつとして、エドワード王子の妹姫か？」

「はい」

すると父は「よし、我らも参戦だ！」と叫び、大臣達が拍手をした。

「あそこの姫は倍率が高いんだ。1000年以上続く古い王族の姫だし、魔力はあるし、気立てはいいし、賢いし、美人だし。山盛りの求婚者がいるが、負けるなよ！」

あの姫はそんなに名高い方だったのか。今まで知らなかったことが悔やまれる。

「まずは身辺整理だな。婚約者候補達には、解消の旨伝えておこう。身辺は清潔にしておかねば、他の男達に遅れを取る」

「お願いいたします。彼女たちには私からも誠意を持って説明しておきます」

「それがいいな。女性のネットワークというものは侮れないからな。いつ姫にお前の悪い噂が届くかわからん」

婚約者候補の姫たちは、私がティ・ルナ・ノグの姫に恋をしたと告げると「……あの姫では太刀打ちできませんわ」と涙ながらも身を引いてくれた。

そして、身辺整理、留学の手続きを済ませ、私はティ・ルナ・ノグへと向った。陸路と海路でおよそ1ヶ月の長旅だ。

魔法騎士達は、その距離を3日で渡るといふ。私にも魔力があれば、直ぐにでもあの島へ行けるのだが……。

そして、1ヶ月後。私は半年振りに親友のエドワードと再会した。

「君って以外と情熱家だったんだね」

彼は呆れながらも私を歓迎してくれ、彼の両親でティ・ルナ・ノグの国王夫妻に紹介してくれた。

国王ロバートは、エドワードに良く似た方だった。ボクのほうが、金髪がキラキラしている』とエドワードは言っていたが。

そして吟遊詩人たちが詩にする王妃マリーナは、緑がかった豊かな黒髪と、海路でみた深海の青の瞳の美しい方だった。

・・・彼女が異界の人魚姫なのか。

「このたびはようこそ我が国へ！」

「遠路ご苦労様でした。歓迎の宴は明日にでも。今日はゆっくりとお休みくださいませ」

2人に親しく声をかけられ、膝を折り感謝を述べる。

「堅苦しいのは好まん。君はわが国に来た大事な留学生だ。短い間とはいえ我が国民と同じ。国民ということは、私の子供も同様！通りすがりに気軽に挨拶するくらいの仲になるうじゃないか」

わが国とはあまりに違うフレンドリーな国民性に若干驚きつつも、暖かい言葉をかけられ、私は今回の目的の一つである彼女のことを聞いてみた。

「国王夫妻には、姫がいらっしやると伺っています」

「デイジーか？ 親バカですまんが、美しさも気立ても賢さも、そんじょそこらの姫には負けんと思っっているよ」

「まあ、アナタったら」

デイジー……。姫の名をあっさりと知ってしまい、私は口の中でその名前を反芻した。

愛らしい花の名前。

「実は私は姫に恋をしてしまったのです」

「ロマンチックな話だな」

「ステキですわね」

「ぜひ、求婚者の一人として認めてくださらないでしょうか？」

「・・・わが国は自由恋愛を推奨しているからな」

「私達もそうでしたし、お義母様もでしたわ。その話は娘に直接なさってくださいな」

あっさりと夫妻の許可を得、私は姫を逢うことになった。

エドワードは面白そうな顔をして黙っている。今にも爆笑しそうな顔が気になるが・・・もうすぐ姫に逢えるという事実の前では些細なことだった。

「デイジー！ そのあたりに居るんだらう？」

国王が声を張り上げると「・・・お父様ったら」と愛らしい声が聞こえた。

大きな柱にすっぽりと隠れていた華奢な身体に、愛らしいピンクのドレス。きらめく青い瞳と緑がかかった豊かな黒髪。まるで王妃マリーナの雛形のような・・・。

「貴女が、デイジー姫？」

黒髪の美少女はニコリと微笑んだ。

「ええ。わたくしがデイジーですわ。貴方のお逢いしたリディアナお姉さまではありませんの」

そして私は恋する姫の名前がリディアナだと知った。  
横でエドワードが笑っている。

「フフ、これで君にも黒歴史が出来たね！ リディアと間違っ  
てデイジーに求婚！」

彼は私に黒歴史を作るために今まで2人の妹がいる事実を黙っ  
たのだろうか？

それが間違っていないと思われるほど彼の微笑みは邪悪だった。

## 異界の冬の女王に再会するために（後書き）

頑張ったのは「ハルベルトの台詞をうんとキザにしよう」ということでした。ハーレクインみたく。でもダメだった。ちょいキザ系になっただけ？

また次回がんばる。ハルベルトの設定は「テレを知らない男」なのです。設定が死なないように頑張ります。

デージーは「リディアナ」、エドワードは「リディア」と言っていますが、タイピングミスではありません。どちらも彼女の名前です。

## 異界の冬の女王の、兄王子と妹姫

「お兄様は何でも『おちゃめ』で許されると思っているんですわ」

自己紹介からして『おちゃめな性格』なんておっしゃるのですものとデイジー姫はため息をついた。

姫は兄（や父）とは違い、至極まともな性格の持ち主でいるようだ。

「ハルベルト様のようなお友達がいらっしやるのが、本当に不思議」

「凹凸噛みあっているから友人関係が築けるんだよ、デイジー」

デイジー姫の隣に座ってお茶を飲んでいたエドワードが、ウィンクする。

「ハルベルトの、四角四面の王子様な態度が面白くなってね」

「本当に逆ですね。お兄様は見た目だけは立派な王子様ですもの」

「否定はしないよ。違いすぎるから友人でいられるんだよ。恋愛だつてそうさ。自分に無いものを人は求める」

「・・・お母様の繊細さは、お父様にはありませんわね」

「その通り。お祖母さまは直感で動かれ、お祖父さまは熟考タイプだった。細っこい我が雛菊デイジーは雄雄しい男が好みだ」

「否定はしませんわ。でもハルベルト様は、見た目も王子様然となさつておいでだわ」

「それはこいつが見栄っ張りだからだ」

兄妹は言いたい放題で身内を批評し、締めには兄が私をこき下ろした。

「一国の王子として恥ずべき態度を取らないように心がけているだけだよ。帝王学の初歩だろう?」

「そんな初歩は忘れたよ!」

シュタインベルクには必要だが、ティ・ルナ・ノグには必要の無い王族の心得なのかもしれない。

兄よりは言動に思慮深さがあるデイジー姫も、柱の影から立ち聞きしたり、それを後ろめたくも思わず堂々と現れたり、他国の王子の前で身内を批評したりと、通常の淑女ではありえない言動を取っている。

だが、彼女はどんな淑女よりも優雅で気品に溢れているように見えるし、エドワードもどんなに傍若無人に振舞っても高貴さは消えない。

「ボクは遠回りな言動はキライだ。だから、さつき両親にリディアのことを聞いた君の態度は実にボク好みだ」

「直球でしたわ」

デイジー姫は姉姫に間違えられたことを全く気にしていないようにホツとする。

「エドワード。なぜ君はリディアナ姫の名前を私に教えたんだけ?

デイジー姫が先に言ったから?」

「直球だね。ボクにはそれが美学だから、直球で返そう。それはティ・ルナ・ノグだったからだよ」

「………異国イコクでリディアナ姫の名前を言うことはタブ

ー?」

「リディア・リディアナ・リディエール」

まるで詩を朗読するかのよう、デイジー姫が名前を読み上げた。

「お姉様の本当の名前ですわ。まるで詩のような名前でしょう？」

「異界の四季の王が一つずつ名づけた。冬を除いて3人だ」

「魔力のある方たちの名づけたものなので、魔力に溢れていますの。この国以外では名を呟くだけで異界への歪みひずみが現れてしまいますわ」

「だから彼女は名乗らなかつたのか」

「リディア自身が名乗る分には大丈夫だけど、他の人がうっかり口に出したら、魔獣が歪みからひよっこり、ってこともありうるからね」

「他に聞きたいことはありません？ お姉さまのお話をするのは大好きですの」

デイジー姫が親切にもそう効いてくれたので、私は更に質問してみました。

「エドワード、君が妹が2人居ることを私に言わなかつたのは、国王夫妻の前で恥をかかせたかつたから？」

私が、デイジー姫とリディアナ姫（とりあえず最初に聞いた名前で呼ぶことにする）を勘違いしていたことを知った国王は、それは愉快そうに笑つたのだった。

「恥つていうかー。ちよつとした『おちやめ』だよ」

「お兄様、おちやめで全ては許されませんかよ？」

「だってこいつ完璧すぎて詰まらないし」

「だってじゃありませんわ！」

「うー。ごめん、ハルベルト」

「……………もういいよ。氣勢が殺がれた。君の『おちゃめ』にはそういう効果があるのかな?」  
「そうだといいけどね」

兄の非礼のおわびに……とデイジー姫が切り出した。

「リディアナお姉さまの情報を教えて差し上げますわ。お姉さまはおそらくこの5日の間にいらっしやいます」

「?」

「なんで分かるんだい?」

「それは料理長のギルが『上等なカボチャが獲れた』と今日の朝言っていたからですわ。」

お姉さまはカボチャのスープが大好きですの。カボチャが食べつくされてしまつまえに、来てくれます」

「……………リディアの不定期訪問ってギルのメニュー次第なわけ?」

「それ以外にも色々ありますけれど、理由の一つではありますわね」

「……………こういうなんとも言えない理由を聞くと、ボクとリディアは兄妹なんだって思うね」

エドワードが肩をすくめた。

異界の冬の女王の、兄王子と妹姫（後書き）

次回は、リディア・リディアナが登場（予定）

異界の冬の女王の朝食風景（前書き）

サブタイトルが思いつきませんでしたっ！

## 異界の冬の女王の朝食風景

お姉さまはおそらくこの5日の間にいらっしやいますわ。

エドワードが『うちの雛菊デイジーが言うんだから、本当に来るよ。あの子は母親に似た顔で、頭の中はお祖母様おばあさまそっくりなんだ』と呟いたものだから、ハルベルトはその夜中々寝付けなかった。

が、いつもの時間にスッキリと起床すると、国から付いてきた従者オリバーに着替えを手伝ってもらい、国王家族と共に朝食を摂るべく、広間へと向った。

ハルベルトは留学生であり、大国シュタインベルクの皇太子である。国のために最初と最後の一週間は『外交』に携わり、残りの三ヶ月足らずを学び舎で『学友作りと魔法力学』に費やす。

よって、あと5日は国王家族と食事を摂る荣誉に預かっているのである。

大体の学問は既に取得済みであるハルベルトは、不勉強かつ今後役に立ちそうな学問として、シュタインベルクではなじみの薄い『魔法力学』を選択した。

『三ヶ月じゃ、クシャミくらいの風を起こしたり、鼻水程度の水を降らせるくらいが関の山だね』と上品な顔で下品なことをエドワードが言っていたので、『魔術』は止めたという裏事情もあるが。

さておき、ハルベルトは優雅に広間へ向った。が、まだ少年なオリバーが後ろから駆け足で付いてくるので、いつもの倍は早歩きになっていた。

もしかしたら、リディア・リディアナ殿が既にいらっしやるかもしれない。

そう思うと、一秒でも早く広間に着きたかったのだ。

\*\*\*\*\*

「ああ、ギル。貴方を私の国へ連れ去ってしまいたい」

眠れぬ夜をハルベルトに与えた彼の愛しい人は、広間で料理長のギルバートを口説いていた。

「それは困りませあ。あっしが居なくなっちゃったら、国王様が飢え死にしちまいます」

ギルと呼ばれた料理長は、梳きつ歯を見せつけながらニカリと笑い、リディア・リディアナのスープ皿に山吹色のスープを継ぎ足した。

彼女はさっそくスプーンで口に運ぶ。

ちなみに、現在食卓についているのは、彼女と、彼女の兄エドワード、妹のデイジーの3人だ。

そして、国王夫妻を待たずに食事を開始しているのはリディア・リディアナのみ。

彼女には『食べたいものが目の前にあるのに、待つ』『全員揃ってから食事』という常識は通用しない。  
エドワードは「一人一皿分は残しておけよ」と、妹の暴挙を笑って見ている。

「ハルベルト殿、おはようございます」

姉の食いつぶりを微笑ましそうに見ていたデイジーが、ハルベルトに気付いて椅子から立ち上がり、優雅に礼をした。

「お姉さまっ。シユタインベルクのハルベルト殿ですわ。昨日、こちらに留学されましたの」

リディア・リディアナの銀の星をちりばめた藍色の瞳が、ハルベルトを見た。

「先だって、戦場でお逢いいたしました。……………覚えておいででしょうか？」

これで「そうだったかしら？」といわれたら、地の底まで落ち込み  
そうだが・・・リディア・リディアナは一度見た顔は忘れない性質<sup>たち</sup>  
だった。

人だけでなく、一度見た風景も、一度見た動物も単体で見分けられ  
るほどののだ。

なので、ハルベルトのことは、ちゃんと覚えていた。

ティ・ルナ・ノグの住民達は、留学生を除けば色素が薄い。

彼女が治める異界の冬の国も、白とか灰色とか薄紫とか寒々しい色  
素を持つ住民ばかりだ。

そういう環境のせいか、リディア・リディアナは濃い色になんとな  
く目がいく。

戦場でのハルベルト・シュタインベルクは、クセのあるこげ茶の髪  
に、深い緑の瞳。

マントは瞳と同じ色で、甲冑は自信に溢れた赤。

戦場で目立つということとは、それだけ狙われやすいということだ。

赤い甲冑はものすごく目立つ。大国の皇太子として地味な色は身に  
纏えないとしても、赤はすごいなあ、と思った。

空から騎獣に乗っているときでも目立つたし、近くで見たら、顔の  
掘りも深くてもっと目立った。

「貴方のお姿はひときわ目を引きました。ハルベルト殿」

覚えているかと言ったらそりゃ覚えている。ものすごく目立っただから。

リディア・リディアナは思ったことをオブラートに包んで優雅に答えた。

すると、ハルベルト王子はものすごく感激したようだった。

この人、自分が目立っただけでわかっていないのかな？　と思うほど大げさだった。

今だって、緑に小さくオレンジの刺繍が入ったチュニツクを着ている。オシャレかつ、派手だ。

ティ・ルナ・ノグは温暖な気候だから、足はサンダルだが、それだつて赤み掛かった茶色と色鮮やかな組紐がオシャレなもの。

これで地味とか思ってるのかな？

そう考えていた彼女の口元には小さな笑みが浮かんでいた。

\*\*\*\*\*

「貴方のお姿はひときわ目を引きました。ハルベルト殿」

愛しい人は、そう言って口元に薄く笑みを浮かべてくれた。

だからハルベルトは、再会したばかりだということも、ここが国王夫妻待ちの朝食の場所だということも、エドワードにデイジー、従者に料理長、給仕の侍女たちが居ることも、すっかり頭から抜けてしまった。

「どうぞ私に、貴女に求婚する榮譽を与えてくださいませんか？  
リディア・リディアナ姫」

リディア・リディアナはスプーンを握り締めたまま、目を見張った。

## 異界の冬の女王の朝食風景（後書き）

初めてハルベルトの容姿描写を出しました。ゲルマン系です。服装は彼にこだわりはありません。皇太子として広告塔でもあるベキと考えているので、よっぽどじゃないかぎり袖を通します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5416y/>

---

彼女は、異界の冬の女王

2011年11月29日17時53分発行